

# RSウイルス母子免疫ワクチンの予防接種を受ける方へ（説明書）

～よく読んでから予診票を記入しましょう～

## 1. RSウイルス感染症とは

RSウイルスは特に小児や高齢者に呼吸器症状を引き起こすウイルスで、1歳までに50%以上が、2歳までにほぼ100%の乳幼児が、少なくとも1度は感染するとされています。感染すると、2～8日の潜伏期間ののち、発熱、鼻汁、咳などの症状が数日続き、一部では気管支炎や肺炎などの下気道症状が出現します。初めて感染した乳幼児の約7割は軽症で数日のうちに軽快しますが、約3割では咳が悪化し、喘鳴（ゼーゼーと呼吸しにくくなること）や呼吸困難、さらに細気管支炎の症状が出るなど重症化することがあります。2010年代には、生後24か月未満の乳幼児における年間のRSウイルス感染症発生数は12万人～18万人であり、3万人～5万人が入院を要したとされています。また入院例の7%が何らかの人工換気が必要としたとする報告もあります。

RSウイルスの流行には季節性があり、新型コロナウイルスの流行以前は秋冬に流行がみられましたが、近年は夏に流行がみられています。接触・飛沫感染により伝播するため、手洗いや手指衛生といった基本的な感染対策が有効です。治療は症状に応じた治療（対症療法）が中心で、重症化した場合には酸素投与、点滴、呼吸管理などを行います。

## 2. 対象となる方

妊娠28週0日～36週6日までの妊婦で接種時に小郡市に住民票（住所登録）がある方が対象となります。

※転出日から小郡市の住民登録はなくなりますので、転出日以降の接種は、転出先の市町村へご確認ください。未確認で接種した場合は、自己負担が発生する可能性があります。

※妊娠39週に至るまでの間に出産を予定している場合、その14日前までに接種を完了することが望ましいとされています。

## 3. 予診票の記入について

予診票は予防接種を受けるにあたって、医師にご自分の健康状態を伝える大切な用紙です。内容をよく読み、治療中の病気や飲んでいる薬など、もれがないように記入しましょう。心配なことがある場合は医師に十分相談しましょう。

予診票の下にあるご本人の署名は、医師の診察の結果を聞いてから記入します。

## 4. RSウイルス母子免疫ワクチンとは

RSウイルス母子免疫ワクチンとは、妊娠中に接種を行うことでお母さんの体のRSウイルスに対する抗体を増やします。その抗体が胎盤を通して胎児に移行することで、生まれたお子さんがRSウイルス母子免疫ワクチンによる下気道感染に対して、生後6か月まで予防効果を得られる母子免疫ワクチンです。生後6か月までの有効性が検証されていますが、生後6か月以降の有効性は確立していません。

接種回数 (接種方法)	妊娠ごとに1回（筋肉内に接種）
接種 スケジュール	妊娠28週0日から36週6日までの間に1回接種。
接種に注意が 必要な方	・接種によって妊娠高血圧症候群の発症リスクが上がるという報告もあるため、妊娠高血圧症候群の発症リスクが高いと医師に判断された方や、今までに妊娠高血圧症候群と診断された方 ・筋肉内に接種をするため、血小板減少症や凝固障害を有する方、抗凝固療法を実施されている方

その他、明らかな発熱を呈している方、重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな方、組換えワクチン（アブリスボ®）の成分によってアナフィラキシーを呈したことがあることが明らかな方等は接種できません。

また、心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患等の基礎疾患を有する方、予防接種を受けて2日以内に発熱や全身の発疹などのアレルギー症状があった方、けいれんを起こしたことがある方、免疫不全と診断されている方や近親者に先天性免疫不全症の方がいる方、組換えRSウイルスワクチン（アブリスボ®）の成分に対してアレルギーを起こすおそれのある方等は接種に注意が必要です。

## 5. RSウイルス母子免疫ワクチンの効果

		生後90日時点	生後180日時点
母子免疫ワクチンの効果	RSウイルス感染による医療受診を必要とした下気道感染症の予防	6割程度の予防効果	5割程度の予防効果
	RSウイルス感染による医療受診を必要とした重症下気道感染症の予防	8割程度の予防効果	7割程度の予防効果

## 6. RSウイルス母子免疫ワクチンの安全性

ワクチン接種後、以下のような副反応がみられることがあります。また、頻度は不明ですが、ショック、アナフィラシーがみられることがあります。

また、ワクチン接種による妊娠高血圧症候群の発症リスクに関して、薬事承認において用いられた臨床試験では、妊娠高血圧の発症リスクは増加しませんでした。海外における一部の報告では、妊娠高血圧症候群の発症リスクが増加したという報告もあるものの、交絡因子等の影響の可能性があることから解釈に注意が必要であるとされています。

接種後に気になる症状を認めた場合は、接種した医療機関へお問い合わせください。

### ※副反応の発現割合

発現割合	主な副反応
10%以上	注射部位の疼痛（40.6%）、頭痛（31%）、筋肉痛（26.5%）
10%未満	注射部位の紅斑・腫脹
頻度不明	発疹、じんま疹

## 7. 他の予防接種との同時接種について

医師が特に必要と認めた場合は、他のワクチンと同時に接種することができます。

ただし、海外の知見で百日咳菌の防御抗原を含むワクチンとの同時接種で、百日咳菌の防御抗原に対する免疫応答が低下するとの報告があり、接種間隔等については医師と相談してください。

## 8. 予防接種後の注意点

ワクチンの接種後30分程度は安静にしてください。また、体調に異常を感じた場合には、速やかに医師へ連絡してください。

接種部位を清潔に保つようにしてください。接種当日の入浴しても問題ありませんが、体を洗うときに接種部位をこすらないようにしてください。当日の激しい運動は控えるようにしてください。

他の医師を受診したり、他のワクチンを接種したりする場合は、必ずこのワクチンを接種したことを医師または薬剤師に伝えてください。

## 9. 予防接種健康被害救済制度について

厚生労働省が、予防接種法に基づく定期の予防接種による健康被害と認定したときは、健康被害救済制度の給付の対象となります。接種を受けたご本人及び出生したお子さんが対象となります。

定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障がでるような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、予防接種を受けた医療機関または小郡市健康課（予防接種を受けた時に住民票を登録していた市町村）までお問い合わせください。

令和8年3月